琉球大学学術リポジトリ

親子間のコミュニケーションスタイルについての考察I : 沖縄県のブックスタートの取り組みを通して

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属障害児教育実践センター
	公開日: 2008-03-10
	キーワード (Ja): 親子のコミュニケーションスタイル, ブックスタート, 絵本
	キーワード (En):
	作成者: 友利, 久子, 嘉数, 朝子, 若松, 昭子, Tomori, Hisako, Kakazu, Tomoko, Wakamatsu, Akiko
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/5105

琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要
No.6, 99-109, 2004.

親子間のコミュニケーションスタイルについての考察Ⅰ

― 沖縄県のブックスタートの取り組みを通して ―

友利　久子[1)]・嘉数　朝子[2)]・若松　昭子[2)]

The Communication Style between Children and Parents

― Through the Book Start Program in Okinawa ―

TOMORI Hisako　KAKAZU Tomoko　WAKAMATSU Akiko

要　旨

親子のコミュニケーションスタイルを検討するため、今回はブックスタートプロジェクトの取組を通して考える。乳幼児期からの心の教育の重要性が叫ばれる中、育児不安を抱える母親が増加し、わが国における子育て支援策も多岐に渡る。日本においては、子育て支援策として導入されたブックスタートは、絵本を介して親子のあたたかなコミュニケーションをはぐくむことを支援する活動で、2000年に日本に導入されて以来全国で広がりをみせている。今回は、この活動を通して心の教育の観点から乳児期の親子のコミュニケーションの形成過程を検討し、今後の子育て支援のあり方への示唆を求めるものとする。

キーワード：親子のコミュニケーションスタイル、ブックスタート、絵本

1．問題の所在（社会的必要性）

日本では公立学校週５日制が平成14年度から完全実施となった。これは、これまでの学校教育のあり方を見直す動きの一環であり、学習指導要領の改訂、小学校においては「総合的な学習の時間」や「生活科」などの設置が合わせて行われた。つまりこれまでの偏差値偏重の学校教育の内容を改め、自分で考え行動し、21世紀の社会で生き抜く力を持つ自立した人間の育成を目指すものである。

現在の日本社会は、バブルの崩壊、ＩＴの著しい進展など、高度経済成長期の真っ只中にあった昭和30年代とは状況が大きく様変わりしている。こうした社会環境の変化に対応すべく学校教育の内容が見直されている一方で、青少年の凶悪犯罪の多発や低年齢化、また1990年代には「キレる子ども」、「学級崩壊」などの言葉が流布し、子どもたちの心の問題が取り残されている現状が浮き彫りとなった。そこで国では子どもたちの心をはぐくむため、家庭教育のあり方までサポートすることとなった。

文部科学省では、1997年より「子どもと話そうキャンペーン」を開始している。中でも、家庭教育手帳（乳幼児の保護者向け）、家庭教育ノート（小・中校生の保護者向け）を全家庭に配布するなど、就学前の家庭も含め、家庭教育への具体的なアドバイスや支援活動を開始された。ここでは、乳幼児期からの心の教育の重要性を強調し、親子の絆を深めるため、子どもと触れ合う時間を持つことが大切であることなどを訴えている。

近年は少子化の進行、子育て中の母親を含めた女性の社会進出は著しく、家庭で親子が一緒に過

1) Okinawa Women's Junior College
2) Faculty of Education, Unv. of the Ryukyus

ごす時間は世界的にも最も少なくなっている（図1）。また、家庭教育支援活動では「間違った行いはしっかり叱る」、「子どもが愛されていると実感できるコミュニケーションをとる」などの文言を取り入れているように、家庭での基本的なしつけのあり方やコミュニケーションの取り方まで具体的なアドバイスを行っている。

このような現代の日本の家庭教育に対する問題意識に基づき、筆者は親子間コミュニケーションの形成に関して、具体的な指導方法の一つとして、ブックスタート（以下ＢＳと表記）の取り組みに近年着目してきた。これは、多民族化の進行による識字率の低下と子どもと若い世代の親たちの活字離れなどの社会問題に対し、乳幼児期の全ての子どもたちに本と出会う機会を提供することを目的とし、さらには親子が絵本を介してコミュニケーションを図ることが、子どもの言葉や人間尊重の理念の獲得していく過程に意義を持つとして、英国（以下ＵＫと表記）で誕生した活動である。

そして日本でもＵＫでの成果を活用し、親子間のコミュニケーションの育成と子どもの言葉の獲得、豊かな心の育成などへの有効性を期待し、ＢＳを取り入れた子育て支援策が全国で急速に広まってきている現状がある。

以上の観点から、本研究では、ＵＫと日本におけるＢＳの実践の経緯と、日本における事例を紹介し、親子間の言葉によるコミュニケーションのあり方や子どもの心の教育という観点からの今後の子育て支援のあり方への示唆を求めるものである。

２．ブックスタート（ＢＳ）について（ＵＫ・日本）

(1)　ＵＫでの経緯

ＢＳは1992年に英国バーミンガムで始まった運動である。"Share books with your baby" をキャッチフレーズに、赤ちゃんと保護者が本を通して楽しい時間を共有することを支援している（ブックスタート支援センター：2003）。

同運動発案の背景には、近年の「多民族化」による識字率の低下という大きな社会問題と、さらには本に関心を持たない子どもや保護者の増加傾向（活字離れ）、子育て不安の増加、親子関係の希薄化、などの問題が浮上してきた流れがある。ＢＳは、民族や社会経済的、個人的関心などの差異に関わらず、全ての赤ちゃんにできるだけ早い時期に平等に言葉や文字に出会う機会を提供することを目指し、その一つの解決策として誕生した。

ＮＰＯブックスタート支援センター（Book Start Support Center、以下ＢＳＳＣと略）による2000の英国ＢＳ視察研修報告書によると、ＢＳについて、1992年に実施されたパイロットスタディーでは、バーミンガム大学教育学部研究班により、乳幼児期のうちから本の時間を習慣として持つことが、子どもの発育にどのような影響を与えるか、追跡調査が行われた。同研究班の報告によると、ＢＳを受けていない家族とＢＳを受けた家族（Book Start Family 以下、ＢＦと記す）との比較においては以下のような結果が実証された。

・家庭での本への意識が高まった。
・家庭で多くの冊数の本を親子で共有している。
・本をよく購入している。
・図書館によく行っており、親子で登録もしている。また、92年のＢＦの子どもが２歳半～３歳になった1995年に行われた調査では、ＢＳを受けていない家庭と比べ、以下のような結果が出たと報告された。
・ＢＦは子どもへのプレゼントに本を選ぶことが多かった。
・ＢＦはより多く、赤ちゃんを図書館につれていった。
・ＢＦがより深く本の時間を楽しんでいた。

さらにこれらの報告を元に1998年に実施された追跡調査では、ＢＳを受け、０歳児から本の時間を習慣として持つことにが、その子の言語面、計数面双方の思考能力の発達に大きな影響を与えると報告された。

また同報告書によると、異なる地域事情に応じたＢＳの取り組みについても報告されている。例えば移民や貧困家庭の多い地域では、母親の育児不安の問題は少なく、深刻な識字の問題や子どもの発育の遅れの問題などがあり、ＢＳは全ての子どもに絵本の機会を提供することで、識字率の向上などに貢献している。一方、中産階級の多い地域では、親子関係の希薄化や親子共に活字離れや子どもの会話力の貧困さなど、親子間のコミュニ

ケーションの問題が存在し、ＢＳは親子間のコミュニケーション育成に貢献するなど、地域の事情に応じてＢＳの特性が多様に活用されている事例が報告されている。

このようにＵＫでは、1992年のＢＳ開始以来、学術調査によりその有効性を検証しつつ各地の賛同を得ながら確実に活動が広まり、2000年までにＵＫ全土の約90％の自治体に普及するまでの成果をもたらしている。

今後は、ＢＳツールの質の更なる向上と、活動資金確保の課題を検討すると同時に、ＵＫ国内でのＢＳ効果の地域比較検討を重ねるなど、ＢＳを更に充実させていく方向である。

(2) 日本での経緯と現在の動向

こうしたＵＫの成果を受け、日本では2000年の「子ども読書年」をきっかけに「子どもの読書年推進会議」にてＢＳの内容が紹介された。

その後運動はＢＳＳＣによって推進され、2001年４月に21市区町村での実施以降急速に普及し、2003年11月現在、566の自治体で活動が行われている。

内容は、地域の保健センターで行われる０歳児検診の際に全ての赤ちゃんと保護者にＢＳの理念を伝えながら絵本を無料配布するというものである。ＢＳＳＣの提唱する理念とは、赤ちゃんの心身共に健全な発育に必要なのは親子の心の触れ合いと、育児における保護者の精神的な安定は不可欠であり、それらを本を介して育むことが大切であることと、こうした親子のコミュニケーションの積み重ねが、人とコミュニケーションを取る際の土台となる信頼関係や言葉の確立の基礎であること、などである。

ここで、日本におけるＢＳは、親子のコミュニケーションを図ることが第一義的目的であり、言葉や文字の獲得という識字率向上の側面を持たない点は、ＵＫでのＢＳとは性質を異にする。

ＢＳ実施の際は、ＢＳＳＣから担当者が各自治体に出向き、ＢＳの主旨説明と実際の説明内容などについて指導実施が条件となる。ＢＳＳＣでは、主旨の共通理解はＢＳの普及にあたって非常に重要であるとしている。

さらに、同活動が地域に根付いた運動として展開されることを前提としているため、各地の子育て支援運動の一環として、ひとづくり・まちづくりの運動としての独自性を持つことが期待されている。

日本におけるＢＳが、上記のような性質を持って急速に普及している背景として、乳幼児期からの心の教育の重要性が指摘される中、母親の育児不安の増加、家庭教育の未熟さ、子どもや育児世代の大人の活字離れなど、子どもが育つ社会としてのあり方に問題が山積している状況があると考えられる。

文部科学省では、中央教育審議会の教育課程・指導の充実と改善方策に関する答申において、「生きる力」の育成には学校、家庭、地域社会の連携を基本と捉え、その充実と改善のために、学校・家庭・地域社会が協力して地域の教育環境整備することを課題に挙げている。

また幼稚園、保育所においては、家庭・地域社会との連携を基に、保育現場における「親育て」の課題も、育児相談や子育て支援など具体的な取り組みの中で実施されることが、近年の新たな課題として求められている現状がある。

このような社会情勢を鑑み、ＢＳの急速な普及状況についても、①親子の愛情、心の絆は形には見えないが人間の生きる土台となる重要なものであること、②それらは乳幼児期から育む必要があり、親子間のコミュニケーションの在り方を工夫することで育成できること、③絵本を介することは、多くの親子にとって互いの心を育み、その関わり合いを育て、言葉を獲得する為にも効果的であることなど、ＢＳの特性に掛ける期待が大きいと思われる。その為。日本では具体的な子育て支援策として全国的にニーズが高いと考えられるのである。

３．絵本の重要性

子どもの心の発育に、絵本が優れた媒体であることは、これまでも多くの報告がなされている。Bruner (1990) は、絵本の登場人物の希望、欲求、感情などの主観的状態など他者理解においても、物語を通してその疑似体験を経験し、学ぶことが適していると述べている。

また、田代（2001）は子どもの発達に寄与する絵本の意義について、特に幼児期において、絵本の持つ力は教育的意味だけでなく、親子間の情緒的つながりの面でも大きな意義を持つ、と述べている。

さらに守屋（1994）も、絵本を通して子どもが自己を形成していく過程を報告し、子どもの自己形成においても絵本の果たす役割が大きいことを述べている。

嘉数（2003）らは、本好きな子を育てるには、幼児期からの読書環境が重要であると述べているが、秋田（1998）は子どもの発達と読書環境を考える視点として、①社会文化的活動への参加、②環境に対する能動性、③環境を直接的な環境だけでなく間接的な環境まで広い視点から捉える、という３つの視点をあげている。子どもにとっての本は絵本から始まる。つまり絵本が子どもの発達に与える影響として、単に言葉や文字の学習のみならず、社会的認知に関わる情緒面の発達への影響は大きいと述べている。嘉数（2003）。

また読み聞かせに関して、母親が持つ読み聞かせに対する意義について秋田・無藤（1996）は、「空間・ふれあい」という内生的意義と「文字・知識習得」という読み聞かせの結果として生じる知的な外生的意義の２つがあり、読み聞かせに見出す意義には個人差があるとしている。

今回本研究で扱うＢＳについては、「赤ちゃんと保護者が絵本を介して向かい合い、暖かくて楽しいことばのひとときを持つことを応援する」活動であることから、内生的意義を重視した取り組みであることがわかる。

さらに読み聞かせに関連するものとして、柿沼・上村（2003）による母親の子どもへの語りの観察研究では、語りのスタイルに地域差があることを示している。また神谷（2003）は、「読み聞かせ」を社会・文化的な行動として捉え、読み聞かせが社会文化的な行動であることを示した。このことから、嘉数（2004）らは読み聞かせにも文化差が予想されると述べている。

文化差について友利（1996）は、東京と沖縄における大人の持つ「子ども観」の比較を行った。その結果、社会の生活価値観の基盤として「個人主義」と「同胞主義」の違いから、「子ども観」にも違いがあることを示した。（表１）ここでは、「子ども観」を含める文化伝承に関して、技術体系として用いられる親子間のコミュニケーションのあり方に注目している。

近年の新生児に関する研究から、新生児も既にあらゆる能力を有していることが明らかにされているが、本研究で取りあげるＢＳについても「赤ちゃんはお母さんの声と言葉に歓びを感じています」と述べ、「ゆたかな言葉が秘められた」絵本を、親子のコミュニケーションに取り入れることを呼びかけている。では、言葉を獲得していない乳児に、言葉や文化を既に獲得している親が、絵本の媒介者として何を、どのように伝えているのか。また、ＢＳは親子間のコミュニケーションにどのような影響を及ぼしていくのか。

秋田ら（2003）はＢＳの縦断研究として、乳児が家庭で絵本と出会う過程における母子相互作用に関する報告を行っている。まず読み聞かせに付随する会話について、親が本文を解釈したり絵を

表１　「子ども観」の地域比較

	東京都豊島区（個人主義）	沖縄県那覇市（同胞主義）
価値体系	独立した一個の人格者	「家族」の一員としての存在
技術体系	言語による積極的な追求型のコミュニケーション	察しによって補われる消極的なコミュニケーション
概念体系	“理”を理解する能力をすでに有した独立した一個の人格者として対等な位置に存在している者	未発達な、“理”を理解する能力を持たない、大人よりも低い位置に存在する者
信念体系	“理”を理解することのできる独立した一個の人格者	小さい者、かわいい者、許される者、ひたすら愛される者

友利（1996）

読み取って言葉に置き換えるなど、子どもの関心と会話のために絵本と子どもの仲立ちをしており、親の与える言語情報が多いことを示した。

また、そのときに母親が絵本場面の何をどのように伝えるかを調査し、乳児への絵本の読み聞かせは「絵本について話す場」であり、多様な発話形態で子どもに話かけており、子どもの反応を引き出す「絵本」を介して母子間でのやりとりを作り上げる場となっていることを示した。

このように乳児に対する親の読み聞かせは、親が子に言葉によって働きかける割合の高い場であり、日常場面とはテーマを異にする親の言語情報が豊かになると推測されるのである。

以上のことからも、現在日本で急速に広まっているＢＳについては、親子間のコミュニケーションスタイルの形成への影響についても、示唆が得られるものと考える。

４．ＢＳの事例

＜沖縄の取り組み＞

ここではＢＳの１つの事例として、沖縄県那覇市での取り組みを取り上げる。ここで取り上げるＢＳとは、ＢＳＳＣの規定により、ＢＳの理念やＢＳの実施方法について直接指導した自治体を指す。

沖縄県では現在、伊是名村（開始年2002年）、那覇市（同2003年）の２自治体でＢＳが行われている。このうち那覇市では乳幼児一般検診の際、９～11ヶ月の乳児を対象に、ボランティアスタッフによって活動が行われている。那覇市のＢＳについて、概要は以下のとおり。（表２）

表２　那覇市におけるＢＳの概要

項　　目	内　　容
所　　管	教育委員会：社会教育・スポーツ課
関係課	教育委員会：健康推進課 子ども課 那覇市立図書館
対　　象	那覇市内在住の９～11ヶ月の乳児とその保護者
機　　会	那覇市乳幼児一般健診
調査実施日	12月21日（日）9：30～11：30
実施スタッフ	沖縄県子どもの本研究会 沖縄県地域児童文庫連協議会那覇市文庫の会 保育士ＯＢの会、保育所・児童館職員 母子保健推進員
説明内容	①　那覇市子育て支援プランの説明 ②　ＢＳの説明 ③　絵本の読み聞かせの実演 ④　絵本の紹介 ⑤　地域の図書施設、子育て支援施設などの紹介 ⑥　絵本、その他の資料配布 ⑦　アンケート協力依頼
配布資料	絵本一冊（５種類の中から選択） イラストアドバイス集 推薦絵本リストと公共図書館の案内 那覇市子育て施策関係資料
紹介絵本の種類	いないいないばあ おつきさまこんばんは がばんごとんがたんごとん くだもの じゃあじゃあびりびり

＜1＞　方法

筆者は、那覇市のＢＳの実状をより深く知るため、ＢＳの現場において以下の内容（表３）で３つの記録を取り、ＢＳの内容検証と親の普段のコミュニケーションに関する聞き取りを試みた。

＜2＞　結果

①　スタッフの親への説明内容

録音した記録を起こし、ＢＳとして必要な説明内容がどのように含まれているかを分析した。説明内容の質に個人差がみられたが、以下（表４）にタイプの異なる３つの事例と、コメント１、２、３を紹介する。

＜コメント１＞

聞き取りを行った８人のうち、説明内容①～⑦の全てが含まれていた事例はCase-2を含めて３件であった。その他時間や乳児の体調など都合に応じ、③以外の内容と時間を短縮して簡単に行った事例が２件。説明内容が３つ以下だった事例が３件であった。

取り上げた事例のCase-1についてはＢＳの理念の説明と絵本の紹介がされておらず、絵本をあげるだけに留まっており、ＢＳが成立していない。

Case-3についてはＢＳが成立しておらず、説明内容も反れている。さらに、スタッフの説明に「ちょっと高度なんだけどね」という発言がある。他の親との会話の中にも「分かるかな？まだ分からんよね」など、スタッフ自信が、対応している子どもが絵本をまだ理解できないと考えているように思われる発言が度々出現した。こうした発言は、ＢＳの主旨とは異なると考える。

このような発言が現れる原因として、スタッフの持つ「子ども観」が影響していると考える。友利（1996）（表１）が示すように、子どもが「未発達な、“理”を理解する能力を持たない、大人よりも低い位置に存在する者」という概念体系の影響によるものと思われ、「同胞主義」的生活価値観に基づくものと考えられる。

また録音記録全般を通して、読み聞かせの意味や効果、また絵本や那覇市の施策説明を行う際、スタッフの発言に「あれだからね」、「考えさせられる本でね」、「上等だからね」、「かなり効果がありますからね」など、抽象的な表現が見られた。

日本語の表現の特徴について三森（2002、2002、2002、2003）は、主語がなく、名詞や目的語を「あれ」に置き換えることの多い抽象的な言語であると述べている。さらに、日本式コミュニケーションスタイルを「羅列型」であると述べ、人にわかりやすく物事を伝えるためのコミュニケーションスタイルとして「問答型」の対話をする必要があると述べている。

こうしたコミュニケーションスタイルを基本に、伝達すべき情報を相手に伝える「説明の技術」について (1)概要から詳細へ (2)空間的秩序、(3)時間的秩序、(4)情報の整理、(5)客観的な表現、(6)情報の受けての設定、の原則ルールがあるとしている。

ＢＳのスタッフには説明内容の共通理解と同時

表３　調査概要

内　　容	方　法	質　問　事　項	人数
①　スタッフの親への説明内容	録　音	―	8
②　ＢＳを受けた親の感想	聞き取り	1）ＢＳはどうでしたか 2）普段読み聞かせはしていますか 3）意思表示も多くなってきた頃だと思いますが、最近は親子でどんなやりとりが多いですか 4）お子さんとコミュニケーションで気をつけていること、または気になっていることなどありますか	20
③　スタッフのＢＳを実施した感想	聞き取り	1）今日の活動の感想は 2）今後の課題や提案などありますか	

表４　スタッフの説明内容―事例３件

	会話の内容（一部略）	含まれている説明内容 （表２：説明内容参照）
Case-1 スタッフＡ の場合	Ａ：こんにちはー。 （スタッフと机越しに着席したとたん、子が本を手に取って開く） Ａ：自分で開いてるねー。 親：本が家にいっぱいあるので。 Ａ：本が好きだねー。すごいねー。全部（全ページ）チェックしてるさー。 （事業内容を簡単に説明） どれか一冊上げるよ。持って帰っていいよ。どれがいい？ あ、自分で選んだよ。じゃあ、お母さんと一緒にお家で読んでねー。	⑤ ⑥
Case-2 スタッフＢ の場合	Ｂ：普段、お家で赤ちゃんと一緒に絵本を読んだりすることありますか？ 親：いえ、なかなか。たまにはやってるんですが。 Ｂ：今日は、お母さんと赤ちゃんに一緒に絵本を楽しんでもらおうということでいくつか絵本を紹介しています。（置かれている本を子が手に取り、口に入れる。） 親：あ～、だめ、だめ。 Ｂ：赤ちゃんはね、何でも口に持っていって遊びますから、赤ちゃんの本はこうやって、噛んでもいいようになっているんですよ。全部を読まずに、好きな頁だけでもいいんですよ。そうやって楽しくお母さんと絵本を一緒に読むことで、だんだん、お母さんの話が聞けるようになっていきますからね。お父さんにも、絵本を手にして一緒に関わるように勧めて下さいね。絵本が兄弟が選ぶ場合もあるよ。何でもいいよ。 （事業の簡単な説明、近所の図書施設の紹介。）	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ その他： 絵本を会した父親、兄弟とのかかわりを促す。
Case-3 スタッフＣ の場合	Ｃ：赤ちゃんにはいつも読んで聞かせてるかな？いつも、絵本なんかはどんな絵本を？ 親：図書館で借りてきた本とか… Ｃ：そうですか。こういう赤ちゃんの本は？ 親：あります（赤ちゃんの撥語から） Ｃ：あ、お話できる。 親：もう、すごい、もう。 Ｃ：この中でNちゃんが好きな絵本あるかな？　　だいたい、読んで聞かせる時にはお母さん、どんな風に？ 親：一応もう、だいたいが眠る前なんですよ。だから、お布団の所で。物語とか、ちっちゃい短い、そんな長くない話の Ｃ：物語は寝ながら読んでいる感じ？ 親：そうではなくて、一応もう、座って読んでいる Ｃ：じゃあ一応、赤ちゃんと対面してというかね、顔見ながら？ 親：うん、一応 Ｃ：そういうのがいいんですよね。だから言葉が早いんじゃない？パパママって言てる？ 親：言わないね Ｃ：まんま、まんまは言うでしょ。じゃあ、どの本がいいかね。この本はね、“じゃあじゃあ、びりびり”っていう本でね、どれがいい？あのこれ、一応一つお持ち帰り頂けるようになってますから。何か好きなの選ばせて下さい。“いないいないばあは？” 親：いないいないばあがいいかもしれないね Ｃ：いないいないばって、お兄ちゃんがやってくれるでしょ？いないいないば、いないいないば。こんなのも楽しいよね。でもお母さん、見て、いいの取って下さい。 親：これは購入するんですか？ Ｃ：いえいえ、無料で差し上げますので。 親：あ、そうなんですか。こんなのもあるんですね Ｃ：はい、これはちょっと高度なんですけどね。（選択に迷っている時の母親の声は聞き取れない） 親：すごいね、色々いっぱいあるんだね Ｃ：これもきれいだね。じゃ、これにしますか？は～い。	⑥ ⑦

に、説明技術のルールを身に付けるなど、限られた時間内で説明内容を的確に伝えるために、実施手順を項目毎にカード化するなど、工夫をする必要があるのではないか。

② ＢＳを受けた親の感想

親の感想の中から、数点紹介する。（　）内の数字は全20人中の回答者数。

1）ＢＳはどうでしたか

・よかった（20）
・家でも読み聞かせをやってみようと思う（6）
・０歳なのでまだ聞かないと思っていたが、スタッフが上手に読むのをじっと聞いていたので、０歳でも聞いてるんだということが分かった。（3）
・親子でよく本屋に行って子どもの本も買っているが、いつも子（男子）には勉強になるようなもの（数字、文字絵本など）を買っていた。今日紹介してもらった絵本はいつも自分たちが選ぶようなものとは違うもの（絵本、物語絵本など）ばかりで、男の子でもこういうものも必要だと分かったのでよかった。（1）
・読み聞かせの必要性は感じていたが、始める時期はまだ先だと思っていた。もう始めていい時期だということが分かった。（3）
・子どもはよく本をぱらぱらめくっているが、めくっているだけでも興味がある、ということが分かった。（1）
・読み聞かせは、自分にはプロの方みたいにできないと思う。（2）

2）読み聞かせはしていますか

・たまに（3）
・やっていない（6）
・やろうと思うけど、忙しくてなかなかできない（9）
・兄弟に読んでるのを側で聞いてるから赤ちゃん向けには特にやっていない。（2）

3）意思表示も多くなってきた頃だと思いますが、最近は親子でどんなやりとりが多いですか

・まんま、ママ　が言えるようになってきた。まんまは好きな物のことだと分かり、それを取ったり選んであげたりしている。（3）
・いや、いやが分かって言えるようになったので、好き、嫌いが分かるんだなと思い、やりとりが増えた。（2）
・特別何もない。名前を呼んだり、おはようのあいさつなど、普通に関わっている。（7）
・何か一生懸命伝えようとしているみたいだけど、分からない。（1）
・あー、とかうーとかだけ。まだ何も喋らない。（5）

4）お子さんとコミュニケーションで気をつけていること、または気になっていることなどありますか

・笑顔で関わるよう、心がけている。（4）
・周りにはつい「この子はうーまくーだね」とか、子どものことを悪く言ってしまう親戚がどうしても多くなってしまうので、親だけはなるべく誉めてあげようと思う。（1）
・生まれてきてくれてありがとう、という気持ちでいつも接している。（1）
・特にない。放ったらかし。兄弟同士で仲良く遊んでいるから、いいかなと思って。（3）
・特に何もしていない。（6）

＜コメント２＞

ＢＳについては、回答者全員が受けてよかったと答えている。その理由として、絵本が無料でもらえる事以外には、我が子ながらも０歳の乳児の持つ能力について新たな発見が多かったことが、親の感想から共通して読み取れる。喋らないから聞いていない、だから読み聞かせも行う時期としてまだ早いと考えている親が多いところに、読み聞かせのプロによる実践は、親たちの乳児観を覆すほどに印象が強いと考えられる。

親子の日常会話については、乳児の発話が極めて限られていることから、親が話かける言葉の種類も限られていることが推測される。

また、親子のコミュニケーションについては、「笑顔を心がける」、「感謝の気持ちを持って接する」など、相互作用の根底にある心理的交流が挙げられたが、言語的交流について触れた親はわずか１名だった。

これらのことから、発話の種類が限られている乳児期の親子間の日常的なコミュニケーションの種類は限られており、その為、乳児理解も偏った

ものになる傾向があると考えられる。

つまり、乳児期の親子が絵本を介したコミュニケーションを交わすことで、日常生活とは異なる言語情報の交流が生まれ、親子間のコミュニケーションが豊かになると考えるのである。

③　スタッフのＢＳを実施した感想から

1）今日の感想

・子どもが反応を示すと親がとても興味を示すので、読み聞かせの実践指導はとても効果的だと思う。（5）
・父親が一緒の場合も多く、父親の方がＢＳについて熱心に質問してくることも多かったので、ＢＳは父親の育児参加への啓蒙にも効果が高いと思う。（2）
・紹介した５冊の本を全く知らない家庭が多い中で、５冊全部持っているという家庭も数件あった。親の本への関心は両極端のようだ。（1）
・興味を示さない親の場合はやりにくかった。（1）

2）今後の課題や提案

・現場が慌しく、ゆっくりと充分な説明ができない。場所やスタッフの人数など、さらに工夫が必要。（5）

＜コメント３＞

全員が、ＢＳの成果に手ごたえとやりがいを感じている。説明の録音記録から、保護者によってはＢＳ対象児の兄弟の読書環境などについて質問したり、読書以外のことで簡単な相談をしている場合などもあり、スタッフの柔軟な対応が見られた。個々の経験が生かせる新たな場の新鮮な環境が、スタッフのやる気を促している印象を受けた。

一方で、現場は非常に慌しく、落ち着いて絵本に触れ合う余裕がない様子が見受けられた。特に後半になると昼食時間が近いこともあり、子どもの機嫌が優れない中で、スタッフと親が慌しくやり取りを交わす場面が見られた。

さらにコメント１でも触れたように、説明内容には個人差も目立ち、限られた時間と人数で親に伝達が必要な内容を的確に伝えるために、説明内容の共通理解と説明スキルの獲得、さらに設営場所の工夫などにより、さらに多くの親に均質の情報が提供されることが期待される。

5．考　察

乳児への語りかけは、親子間の日常的な行為として行われているコミュニケーションである。乳児の表情や動作に合わせて親が語りかけ、その語られる言葉によって乳児の表情が豊かになり、次第に発話が増えていくというのが、一般的に捉えられている乳児の言葉の獲得過程である。

今回取り上げたＢＳでは、全ての親子に対し、乳児に本を無料配布するだけでなく、乳児にとっての絵本の読み聞かせの意味を説明し、読み聞かせの実演をするところがこれまでにない事例である。「乳児と本」というつながりは、これまでも赤ちゃん絵本などがあるように一般的にも認識はされていたものの、「乳児と読み聞かせ」という組み合わせは斬新であり、読み聞かせに興味を示す乳児の反応は、普段の語りかけへの反応と比べると、親に与えるインパクトは大きい。

乳児と読み聞かせとが結びつかない理由として、絵本が言語情報を扱う物であり、発語の種類が限られた乳児には理解不可能であり、まだ必要ないものという捉え方があると思われる。しかし、絵本の選び方や親のコミュニケーションの工夫により、乳児への読み聞かせは十分成立し得る。ＢＳではⅠ．乳児への読み聞かせの意義、Ⅱ．読み聞かせの実演指導、Ⅲ．絵本のリスト配布により、乳児と読み聞かせを具体的に結びつけて説明するところが特徴的である。これらの観点からも、日本におけるＢＳの取り組みは、絵本を介して親子のコミュニケーションを育むための子育て支援策として、具体的に効果が高いと思われる。また同時に、ＢＳは日本全国において、実際に定着しつつある。

しかし一方で、今回取り上げた事例のように、スタッフによってＢＳの説明内容にばらつきが見られた。スタッフの説明において問題と思われた事例は１）ＢＳの中枢であるＩの欠如、２）自治体の子育て支援とＢＳの関係認識とその説明順序、の２つのパターンである。

この問題が起こる原因として考えられるのは、Ａ．時間的・空間的要因、Ｂ．人員的要因、Ｃ．

技術的要因、の３つである。ＢＳの更なる充実のためには、それぞれに改善課題があると思われるが、Ｃについては個人的要因以外に地域的コミュニケーション形式要因が影響すると考えられる。これについては、説明内容を的確に端的に相手に伝えるため、実実施手順として説明要項を作成し、説明技術の向上に向けて手順を統一するなどのシステム整備が求められるだろう。

６．結　び

ＢＳの取り組みを通じ、「乳児と読み聞かせ」は親子間のコミュニケーションを形成する一つの方法として、今後子育ての中に浸透していく可能性があることを見出した。それは、絵本の持つテーマ性によるものであると思われる。

発語の極限られた乳児にとって、親子間の言語的コミュニケーションは親から一方的に受ける場合が多い。その際、乳児期の寝食、排泄、身体性の低い遊びという単調な日常生活では会話の種類が限られてくる可能性がある。そこで、絵本が提供するテーマによって、乳児と親の間に日常生活とは異なる種類の対話（双方向性の言語情報）が増えると考えられることが１つ目の理由である。

２つ目に、絵本の持つテーマが地域性に左右されないという点である。ただしこれは、絵本が民話と異なることが前提となる。乳児が親と一緒に楽しめる長さの絵本となるとストーリーもシンプルで短い話となるが、親が絵本について話をする時、そこに地域特性など地域文化の影響を受ける可能性は低くなると思われる。

言語や文化の習得が始まったばかりの乳児にとって、既に言葉や文化を身につけた親との言語的コミュニケーションにおいて、文化的影響を多く有する日常会話と、文化的影響の少ない絵本についての対話という２つの対話形式を有することは、乳児の言語体験をより豊かにするものと考察される。

＜引用文献＞

Bruner, J. 1990 Acts of meaning, Cambridge, MA: Harvard University Press.

秋田喜代美・無藤隆　1996　幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の研究　教育心理学研究，44，109-120

秋田喜代美　1997　読書の発達過程　風間書房

秋田喜代美　1998　読書の発達心理学　国土社

秋田喜代美・横山真貴子・森田祥子・菅井洋子　2003　ブックスタート協力過程の母子相互関係　日本発達心理学会第14回大会発表論文集

嘉数朝子・上地亜矢子・松岡幸子・嵩原直子・仲盛夫美子・島袋貴子・渡久山恵美理・宮里文子・比嘉逸子・前白晶子・小林貞浩・島袋恒男　2003　沖縄県の幼児の読書環境を拓くための予備的研究　琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要　5，1-11

友利久子・嘉数朝子・大城一子・仲程えり子・金武朝成・仲村美鈴　2004　子どもの自尊感情の発達と親子のコミュニケーションスタイル　琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要　6，111-133

柿沼美紀・上村佳世子　2003　母親の語りに見られる地域差　(2)　発達研究　17，87-96

神谷美智子　2003　読み聞かせと母親の子育て感および子どもの言語発達との関連　金城学院大学人間生活研究科修士論文要旨集

河合隼雄・松居直・柳田邦男　2001　絵本の力　岩波書店

小池和男　2000　聞き取りの作法　東京経済新報社「子ども読書年」推進会議・ブックスタート英国視察団　2000　英国ブックスタート視察研修報告書

三森ゆりか　2002　論理的に考える力を引き出す　一声社

三森ゆりか　2002　子どもとマスターする50の考える技術・話す技術　合同出版

三森ゆりか　2002　絵本で育てる情報分析力　一声社

三森ゆりか　2003　外国語を身につけるための日本語レッスン　白水社

ジャムネットワーク　2002　親子で育てる「じぶん表現力」　主婦の友社

田代康子　2001　もっかい読んで　ひとなる書房

高橋順一　1991　異文化へのストラテジー　川島書店

友利久子　1996　地域特性からみた「子ども観」

について　日本女子大学修士論文
福沢周亮　1991　子どもと本の心理学　大日本図書
ブックスタート支援センター　2003　ブックスタートハンドブック　ＮＰＯブックスタート支援センター
那覇市教育委員会　2003　那覇市子育て支援ブックスタート事業実施資料
箕浦康子　1990　文化のなかの子ども　東京大学出版会
守屋慶子　1994　子どもとファンタジー・－絵本による子どもの自己の発見－　新曜社
文部科学省　2003　初等中等教育における当面の教育過程及び指導の充実・改善方法について（答申）
文部科学省　2003　家庭教育手帳　文部科学省
文部科学省　2003　家庭教育ノート　文部科学省
横山真貴子・秋田喜代美・ブックスタート支援センター　2002
ブックスタートプロジェクトにおける絵本との出会いに関する親の意識　日本乳幼児教育学会第12回大会研究発表論文集
長沢立子　2001　出版ニュース★
http://www.bookstrt.net/bsuk_bookstart.html
(2004.1.31　現在)
http://www.bookstart.co.uk (2004.1.31　現在)